

櫻間會所蔵品抄

山口 桂

世界での日本の美術品の評価は、すこぶる高い。その事実は、日本美術品が他の世界の芸術品と肩を並べて、ニューヨークのメトロポリタン美術館やロンドンの大英博物館、パリのギメ東洋美術館、ひいてはアラブ首長国連邦のアブダビ・ルーブルに至るまでの、世界の主要美術館や博物館に拠って購入・収蔵された後、大事に保存管理され、そこを訪れる世界の人々に公開されている事からも十二分に証明されるだろう。

その日本美術品の本質は、元来ほとんどが「道具」という事だ。宗教美術と掛軸を除いた、例えば屏風は間仕切り、茶碗も硯箱も根付も武具甲冑も実際に「使う物」で、その「用の美」こそ、日本人が長い間日常生活の場面場面で使用するものに美を見つけ、加え、慈しんできた物である。

が、その「用の美」の中にも、使用されなくなるとたちまち生気を失い、乾いて美を損なってしまう物がある。その代表選手は茶碗と能楽関係の品々で、能面や能装束・舞扇などは当然「能楽」という舞台芸術で使用される道具であるが、能楽師の顔や身体との接点を長い間断たれ、舞台を離れてしまうと、その魅力は半減すると言っても過言ではない。

その意味で櫻間家に伝わる、14-15世紀室町期に活躍した龍右衛門作と言われる小面(若い女の面)を筆頭に、河内大掾家重や出目家などの江戸時代の能面師が作った面、或いは唐織や素袍などの装束、また役柄に応じて使われる扇の数々は、作られた当時から現在まで使われ続けて来ているが故に、制作当時の「用の美」を時には数百年の間そのまま保持し続けている逸品と言って良い。

その中でも能面群は、男・女・鬼神面など種類にも富み、状態の良い処も重要である。舞台上で使われている処も是非見て頂きたい。



山口 桂 (やまぐち かつら)

1963年東京都生まれ。クリスティーズジャパン代表取締役社長。国際浮世絵学会常任理事、公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団理事。92年クリスティーズに入社し、日本・東洋美術のスペシャリストとして活動。19年間ロンドン・NYで海外勤務をし、伝運慶の仏像のセール(08年)、藤田美術館コレクションセール(17年)、伊藤若冲作品で有名なプライス・コレクションの出光美術館へのプライベートセール(19年)など多くの実績を残す。18年より現職。